

## 万葉集における「ムササビの歌」

### 副題 「ムササビ」と大伴坂上郎女

平成二十四年七月十五日(日)の夜七時半から始まる「ダーウィンが来た」というNHK番組で、東京の八王子市も西側に位置する高尾山(高野山薬王院有喜寺も生活の場)に住む「ムササビ」の生態が紹介されました。十数匹の「ムササビ」の生態、ねぐら、行動、食事、恋、子育て等の様子が放映されました。

撮影された人たちの苦労を偲びながら、「ムササビ」への優しい思いやりに和みながら、三十分を楽しみ、録画までしました。

そこで万葉集の中に、三首の「ムササビ」の歌があり、整理していたことを思い出し、私も、万葉集の「ムササビ」の歌を紹介したくなり、ホームページに掲載しました。

「ムササビ」はネズミ目リス科モモンガ亜科で、総体としてムササビ属と分類されています。木の間を飛べる哺乳動物です。

現在では珍しい動物ではないのかもしれませんが、万葉集では、珍しい動物として歌に詠まれています。

万葉集に「ムササビ」が詠み込まれた歌は三首のみで、志貴皇子の歌、大伴坂上郎女の歌、それに作者不詳歌の三首です。

作者不詳歌が作者不詳巻である第七巻の比喻歌に分類され、収録されていることから、第七巻は誰が編纂したのかを考察する資料の一つにしました。つまり第七巻は大伴坂上郎女が中心になって編纂したという仮説を立てて、その立証を試みました。この報文にもその仮説を立証しようとする考察が底流に流れています。

以下、三首の歌を紹介し、まず万葉集の中期の歌人が「ムササビ」をどのように見ていたのかを味わってほしいと思います。

まず「ムササビ」で思い出すのは大伴坂上郎女の歌(巻六・一〇二八)です。この歌は聖武天皇が高円の野に狩に出かけられた時に、都里に逃れて来て、捕えられた「ムササビ」を見て、猟で天皇がおられるところ(御在所)に献上しようとして大伴坂上郎女が詠んだ歌です。

### その一 大伴坂上郎女の歌 巻六・一〇二八

十一年己卯、天皇の高円の野に遊獵し給ひし時に、小さき獸都里の中に排走す。ここに適

勇士に値ひて生きながらに獲らえぬ。即ちこの獸を以ちて御在所に献上るに副へたる歌一

首(獸の名は俗にむざさびといふ)

▼大夫の高円山に迫められたれば里に下りける鼯鼠ぞこれ

右の一首は、大伴坂上郎女の作なり。ただ、いまだ奏を経ぬに小さき獸死斃れぬ。これに因りて

歌を献たてまつることを停とどむ

十一年己卯、天皇遊獵高圓山之時、小獸泄走都里之中。於是滴值勇士生而見獲。即以此獸獻上御在所副誦一首（獸名、俗曰牟射佐妣）

▽大夫之 高圓山尔 迫有者 里尔下来流 牟射佐妣比（一字）曾此

右一首、大伴坂上郎女作之也。但、未至（しんにゆう有）奏而小獸死斃。因此獸誦停之。

この歌の原歌でも「ムササビ」を「牟射佐妣比（一字）」と記し、題詞注に「牟射佐妣」と念を押していますから、いずれも「むささび」と読めますが、実際は「むざさび」と濁音がついています。留意すべきことですが、以降は「ムササビ」と記します。

この歌は狩りをされている聖武天皇に奏上されることはありませんでした。献上しようとした珍しい獣、「ムササビ」が死んでしまったからです。

「ムザサビこれ」が「この獣はムササビでございませ」と判かれれば、この歌は理解できます。しかしそれでは平易な理解でしょう。多分追いつめられて捕らえられた獣の名前を誰も知らなかったのです。珍しい獣だったと推察します。しかし大伴坂上郎女はその獣が「ムササビ」と知っていたので、天皇に歌をもつて献上しようとしたのです。しかし死んでしまったので獣を天皇にお見せすることもできず、従って歌も献上しなかったというのが実情です。

この歌では「ムササビ」の名前を大伴坂上郎女が知っていたことが強調されていると推定します。それなら大伴坂上郎女は「ムササビ」をどうして知ったのでしょうか。山で目撃したのかも知れませんが、もう一つの可能性は歌から知ったということです。「ムササビ」に関して志貴皇子の歌（巻三・二六七）があります。

## その二 志貴皇子の歌

### 巻三・二六七番

志貴皇子の御歌一首

▼鼯鼠むすねは、木末求むとあしひきの山の獵夫さつをにあひにけるかも

▽牟佐々婢波 木末求跡 足日木乃 山能佐都雄尔 相尔来鴨

この歌でも「ムササビ」は「牟佐々婢」と記されています。

大伴坂上郎女は、この歌と共に「ムササビ」の名前を知っていたのではないのでしょうか。大伴坂上郎女は志貴皇子の歌に関心を持っていた証左です。志貴皇子は天智天皇の皇子ですが、天武天皇の皇子を含めて、一番倭歌に秀いで、六首の歌が万葉集に収録されています。大伴坂上郎女を愛された穂積皇子が亡くなって一年後に志貴皇子は亡くなっているので、交流さえ、考えられる皇子です。

第八巻の巻頭に春の雑歌を設定し、その第一首目に志貴皇子の歌を設定したのは大伴坂上郎女の思いが込められていると考えるのは考え過ぎでしょうか。

この志貴皇子の歌は、馴染深い歌ですから、ここに掲げておきます。

### ☆巻八・一四一八（第八巻の巻頭歌）

志貴皇子の 権びの御歌一首  
しきのみこ よろこび みうた

▼石ばしる 垂水の上の さ蕨の 萌え出づる 春になりけるかも  
いは たるみ うへ わらび も

志貴皇子権御歌一首

▽石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨

聖武天皇の高円の野に遊行の年、天平十一年の時の大伴坂上郎女の年齢は約四十四歳で、大伴家持が二十二歳で内舍人として安積親王に仕えていた時です。従って、大伴家持もこの高円の野の猟に安積親王と共に参加していたはずです。そういう意味でも大伴坂上郎女にとって、この高円の野の猟には人一倍、関心をもっていたはずです。

更に、大伴坂上郎女も宮廷に出仕するように誘いがあつた時期と想定しています。大伴坂上郎女の実母の石川郎女は天智天皇の皇女、水主皇女に仕えていたからです。

宮廷に出仕するように要請を受けた時期が、この天平十一年の前なのか後なのかを判定することは困難ですが、ほぼ同時期と考えてよさそうです。時期の考察に入るまえに、大伴坂上郎女が宮廷に出仕するように要請されていたということを推定できる三首の歌を掲げます。

この歌の特徴は聖武天皇に直接歌を捧げていることです。そういう意味では、宴席等で天皇に直に声を掛けられた可能性さえあります。

大伴坂上郎女の実像に迫る歌として、これら三首の歌（巻四・七二一、七二五と七二六）を考察します。

天皇に献れる歌一首 大伴坂上郎女、佐保の宅にして作れり

▼あしびきの 山にしをれば 風流なみ わがする業をとがめたまふな  
みやび わざ

天皇に献れる歌二首 大伴坂上郎女の春日の里にして作れり  
かすが

▼にほ鳥の 潜く池水 情あらば 君にわが恋ふる 情示さね  
かつ いけみず こころ

▼外にいて 恋ひつつあらずは 君が家の 池に住むとふ 鴨にあらましを  
よそ

先の「ムササビ」の歌の時期とそれほど違わぬ前後の歌でしょう。

その理由は以下の通りです。これら後半の二首の歌の直後の歌は大伴家持が坂上大嬢に贈った歌

（巻四・七二七）です。この歌の題詞に「大伴宿禰家持の坂上家の大嬢に贈れる歌二首（離り  
さかのうへのいへ おほをどめ

絶ゆることあまた年にして、覆会ひて相聞往来せり」と記されていることに注目します。

大伴家持は大宰府から帰京後に歌の贈答を楽しんでいたのですが、大伴家持がある女性と結婚してしまいました。この女性は妻でありながら「妻妾」と呼ばれ、正妻とは認められていませんが、一人児を残して、天平十一年に亡くなります。第三巻の挽歌の中に大伴家持のその妻への挽歌（巻

三・四六二)に「天平十一年己卯夏六月」と題詞に記しています。高円の野の遊獵の年です。そして再び坂上大嬢と仲が戻り、歌の贈答が再開し、結婚まで進展します。これで大伴坂上郎女は安堵するのですが、

先の聖武天皇への返事ともいうべき歌は、天平十一年末かあるいは十二年初期と考えるのが妥当です。ひと段落したあとに、自分は宮仕えする気力を奮いおこすことはなかったのでしょうか。これらの歌の内容を吟味し、大伴坂上郎女の心境に迫ってみます。

これらの歌の天皇は聖武天皇です。宮廷に仕えた時期があつたのかもしれませんが。しかし、それを示す情報はありません。

しかし、先述しましたが、実母の石川郎女は内命婦として出仕していましたから、出仕の誘いがあつてもおかしくはありません。歌や漢詩に教養のある女性ですし、藤原家を初めとする名家の若者と交流があるからです。一人の例をあげれば、大伴家持と親交もある藤原八束は、八首もの歌が万葉集に収録されていますが、後に真楯と改名し、大納言にまで昇進しています。若くして亡くなっていますので、長寿であれば右大臣あるいは左大臣まで可能性があつたはずですが。が何よりも大伴坂上郎女の父は大納言・大伴安麻呂、異母兄は大納言・大伴旅人だつた女性です。しかしいずれの歌も高ぶつたところはありません。第一番目の歌は年取つて(?)宮仕えするようになり、雅がなくなつたことを詫びています。

全くの謙遜でしょうかありません。大伴坂上郎女は歌を作り続けるのですから。「わがする業」とは「仕業」と解釈され、作法や振る舞いを表すのでしょうか、ここでは宮仕えしない(「わがまま」とも解釈したい)ところです。二人の実娘を育て、大伴旅人の面倒を見て、更に大伴家持の世話をする姿はたくましい女性の姿が浮かびます。雅に生きる余裕はなかつたでしょう。ただそのことを恨みがましい言い訳にせず「風流のない私」を責めないで下さいと詠んでいます。素直に現状を受け入れ、決断できる強い女性の面影が浮かびます。残る歌からも、宮廷の「にはほ鳥」の住む池の水や「鴨」に自分の気持ちを託した控えめでありながら、自分の気持ちを素直に伝える愛すべき女性の姿が浮かびます。昔、穂積親王や藤原麻呂にも愛されたことがあつたというのも肯けます。

### その三 作者不詳歌

#### 巻七・一三六七番

けもの  
獣に寄せたる

▼三国山 木末に住まふ鼯鼠の鳥待つが如 われ待ち瘦せむ

寄獣

▼三国山 木末尔住歴 武佐左妣乃 待鳥如 吾俟将瘦

この歌は(三国山の木の梢に住む「ムササビ」が鳥を待つように、私も恋人を待ち焦がれて瘦せるだろう)と解釈されています。

第七巻ではこの歌は『獣に寄せたる』という分類の唯一の歌です。

分類されていることから、誰かが編纂したと考えられます。最終編者の大伴家持たちが全面編纂したのではなく、基本的には編纂されていたと考え、その一次編者を大伴坂上郎女と仮定したの

です。万葉集において数少ない「ムササビ」の歌で、『猷』に分類された歌が「ムササビ」の歌一首というのも、大伴坂上郎女の影響が推察されるのです。

この歌は誰が作り、どういう状況で詠まれたかははっきりしていませんが、「われ待ち痩せむ」と嘆いていることから、この歌は女性の作であることは間違いありません。当時の女性は男性が通ってくるのを待っている立場でしたので、「待ち痩せむ」と詠むのは女性であると考えられるからです。

この原歌でも「**武佐左妣**」と記され、「むささび」と読み、動物の「**ムササビ**」と同定するのは納得です。大伴坂上郎女と関係ある歌と想定できるのか、歌の内容を考察してみます。まず「**三國山**」ですが、抽出されるのは本題歌だけです。

特定の山を想定しているとは思えませんが、三國の接点に位置する山でしょうか。あるいは巻三・二四四番の柿本人麻呂歌集から収録された歌に「吉野」を「三吉野」と記し、「み吉野」の意で使った例があります。同じ論法で「三國山」を「み國山」と解釈できればと考えますが、「國山」で検索するともう一首抽出されます。第七巻にある同じ柿本人麻呂から収録された歌（一三〇五番）に詠まれた「人國山」です。この山は和歌山県田辺市の山と推定されています。類例もなく、「三國山」は依然として不明のままです。しかし、この女性は自分の足で確かめたのではなく、人から聞いて知ったというのが実情です。

次に「**木末**（こぬれ）」です。原歌で「**木末**」が十二首、万葉仮名（「許奴礼」）が六首と合計十八首が抽出されます。作者あるいは出典の判明した古い歌は、志貴皇子の歌（巻三・二六七）と古歌集（巻七・一二六三）があります。それに大伴家持の歌が六首もあり、その内二首が「**木末**」で、残り四首は万葉仮名です。大伴坂上郎女の歌は一首もありますが、他に大伴稻公の一首の歌（巻八・一五五三）があり、大伴家の人たちが多用した語句ということが言えます。志貴皇子の歌と第七巻に収録された歌が二首あるのは更なる考察が必要です。

次に注目するのは、「**ムササビ**」と「**瘦**（痩せる）」を関係づけていることです。「**瘦**」を原歌で検索すると、万葉仮名の一首（巻十五・三五八六、古歌集）（「夜勢曾」（「瘦せそ」）を含めて、十首が抽出されます。

古い歌をまず掲げれば、弓削皇子の歌（巻二・一二二）と古歌集がありますが、古歌集が万葉仮名していることに留意します。万葉仮名化がいつも新しいと単純に考えにくい例かもしれませんが、ここでも大伴家持の歌が三首抽出されますが、その内二首は「瘦せた人」を笑って、ウナギ（当時はムナギと称していた）を食べたらよいと勧めた戯作の歌であることに留意しますが、ほとんどは恋あるいは待たされるのに痩せるといふ深刻な気持ちを表すのに詠まれています。その中大伴坂上郎女の歌が一首（巻四・七二三）あります。この歌は聖武天皇に贈った三首の歌の第一首目の歌から大伴家持の歌を挟んで、配列された歌です。京に置いてきた娘の坂上大嬢のことを心配して、農作業の管理のために跡見庄に出かけていた大伴坂上郎女が贈った歌です。「わが児の刀自をぬばたまの夜昼といはず思ふにしわが身は痩せぬ」と詠んでいます。この時期、実娘の坂上大嬢のこと、大伴家持とその妻の死と行く末のこと、聖武天皇への返事等、思い詰めることが多かったことは確かです。第七巻の作者不詳歌の「**瘦**」も大伴坂上郎女を連想する語句なのです。

「**ムササビ**」はなぜ「鳥」を待つのでしょうか。生態的に意味があるが分かりませんが、「**ムササビ**」は空を飛ぶことから一緒に飛ぶように「鳥」が飛んでくることを待っていると仮想したのでしょうか。「**ムササビ**」が作者で、「鳥」を恋しい男性、あるいはその使者と想定すれば、意味は

通じます。「ムササビ」が飛行する体形、あるいは空を飛べることから軽さを連想し、「痩せる」ことを表現したのでしょう。女性が詠んだ歌と想定できます。しかも「待つ」という歌調から大伴坂上郎女が詠んだとしても、全く違和感はありません。ただ断定するのは控えます。

「ムササビ」を万葉仮名ではそれぞれ牟佐佐婢（二六七番）、牟射佐毘（注、毘は田へん）（一〇二八番）、武佐佐妣（二二六七番）と記し、微妙に違います。巻七・一三六七番の歌は大伴坂上郎女が作った歌ではないかと仮定したのですが、「ムササビ」の万葉仮名の差から同一女性の作と断定するのもちよつと無理があります。

万葉集の時代には、「ムササビ」は珍しい動物だったのです。